

手首を拾う

汽船で行くのである。

汽船と云っても小さなもので、元々何のために使われていた船なのか判らない。彼方此方塗装も剥げているし、剥げた処は錆びていて、処に依っては腐蝕しているのである。座る処もないし、逆も揺れる。この船はおまけに大層騒ましいのである。

七年前はもう少し静かだったかと、そう思う。

でも思い違いかもしれない。この船は慥かに七年前に乗った船と同じ船なのだけれど、つまり七箇年と云う歳月がこのいかれた乗り物を確実に蝕んでいる筈なのだけれど、それでも昔乗った時の方が、この乗り物は古びて感じられたのだ。

それは即ち、私が古くなって、この船の古さに近づいたと云うことか。

きつと人と船では時間の流れが違うのだろう。船の方が人より緩慢と齡を重ねるものなのかもしれない。

その昔、まだ若かった私はこの船を酷く古いものだと感じたのだけれど、少し古くなった私は、その時分程の差違を船に感じなくなっているのだ。

私も彼方此方が錆びているのである。

そして腐蝕もしている。

船を操舵する老人には見覚えがない。七年前の老人は、きつと死んだのだ。かなり高齢だったから。

いづれ年寄りが乗るのである。若い人は、こんな何時造られたのか判らないような骨董品の操縦は出来ないだろうし、改めて覚えたとこで詮方ないだろう。おじさん何時から乗ってるんだいと尋ねてみたが、一向に返答はなかった。耳が遠いのか愛想がないのか。

船が煩瑣いのだ。

まったく、自分の声さえ聞こえない。

矢張り七年前はもつと静かだったように思う。あの時は妻の声がちゃんと聞こえていた。

妻は、こんな短い距離なら隣町から海岸沿いに車で行ける処まで行って、後は歩いても良かったわと云った。徒歩ならあの岩場だって渡れるのじゃないかしら、と。ヴァイオリンを撫でるような声音は、雑音に紛れることなく私の耳に届いたものだ。

だんだんだんだんと、無駄な動力が発する音。

噫違う。

それは勘違いだ。

あの時、妻は私の耳許に、しかも息が掛かる程近くに口を寄せてその言葉を発したのだ。

そして、妻の発する声の周波数は、この野卑で暴力的な騒音とは懸け離れたものだったのだから。聞こえて当然だ。

体温より低いけれど冷たくもない海風が耳に当たって、私はそうしたことを思い出す。

だんだんだんだんと云うこの音は、矢張り昔のままなのだ。私の声が私にも老人にも聞こえないのは、朽ちかけた私の声の周波数が、この野卑で暴力的な音に馴染む、草臥れた音色だからなのだろう。

七年前の妻の言葉通り、船はすぐに棧橋に着く。

この海岸は遠浅だから、棧橋は長い。だんだんと云う音が徐徐に間隔を空け始め、唐突に止まった。

にやあにやあと海鳥が啼くのが聞こえた。

見覚えのない老人は、無言で船を舫いだ。

その黒ずんだ無表情な横顔を、私は見るとはなしに眺めた。動きは億劫そうだし、無表情だからか、随分厭そうな態度に窺える。

これ程齡を取っているのに、僅かばかりの年間賃でこんなつまらない仕事をしているのだから、實際厭なのだろう。だからと云って機嫌を取る謂れもないし、そう思うと礼を云う気も失せてしまった。寧ろこの場は老人と同じように振る舞う方が相応しいようにも思えたから、私は不機嫌を装って無言で棧橋に降りた。

棧橋も、少し腐っていた。

脱色した板を踏み乍ら少し進み、透いた板目の間から覗く海面を認めた辺りで、漸く私の耳には波の音が聞こえ始めた。だらしなく凪いでいるから、静かなものである。

一寸だけ振り返ると老人と目が合った。

瞬間的に睨まれてるように感じたから、私は足早に棧橋を渡り切って浜に降り立った。

ごつごつとした感触。

石ばかりの海岸なのである。

岩場ではないのだ。大小様様の丸石がずつと敷き詰められている。否、人工のものではないのだから、敷き詰めたと表現するのはおかしいだろう。この丸石の絨毯は、天然の意匠なのである。

こう云う浜を何と呼ぶのか私は知らない。砂浜に対して石浜とでも云うのだろうか。

七年前。

汽船の錆びた手摺りに纏まり乍ら妻と二人で眺めたこの浜は、大層目に美しく映ったものである。でもこの丸石の浜は、遠目には美しく見えたのだけれど、実際は汚れていた。七年前も、汚れていた。

今も同じだ。

石自体は綺麗なものなのだ。角もないし、表面も滑らかで、真っ白だ。潮が漂白するのだろうか。でも、石と石の間には塵芥が沢山覗いている。空き缶、潰れたペットボトル、食品の包装紙、避妊具の袋、孔の開いた運動靴、人形の腕、そして何故か注射器などの医療用具や自転車の車輪のような大きなものまである。誰が捨てるのか。

こんな場所でも人は来るのだ。

それは来るわよ。

妻の言葉だ。でも、妻はそう云い乍らも海の彼方に視線を投じていたのだ。

此処には外海からの漂流物が流れ着くよ。

そしてそんなことを云った。

そんな筈はないさと私は答えた。この浜辺は湾の内側に向かっているのだ。その証拠に妻が眺めている方向には対岸の街が見えていたと思う。いや、海流のことまで私は知らないから、もしかしたら外海からの漂流物が湾の中に流れて来ることもあるのかもしれない。

しかし、そうだとすると、その漂流物は間違いなく此処ではなく、湾の中心に打ち寄せられる筈である。この浜辺は、たぶん外海に背を向けて、狭い湾の内側にひっそりと口を開けているだけのものなのだから。

つまらない人ねと妻は云った。

そして足許から潰れた箱のようなものを拾い上げると、ほらこれは朝鮮半島のものじゃない、と云った。慥かに見慣れないパッケージだった。文字も読めなかった。国内で売ってないわよ、韓国の人がこんな処にやって来てお洗濯したとでも云うの、と妻は云った。

それは、粉末洗剤の空き箱だったのだろう。私はそうだな、じゃあそうなんだろうと、酷く如何でも好いもの云いをしたのだ。妻はその後も、何かを確認するように幾つもの丸石を裏返したり持ち上げたりしていたけれど、彼女が果たしてそこに何を見つけたのか、私は知らない。

屈んで、ひとつ石を持ち上げてみた。

大きな船虫が、ぞろりと動いただけだった。

そのまま立ち上がる。そして、見上げる。猛猛しい磐山が聳えている。岩盤が剥き出しになった、文字通りの磐山である。その山が交通を妨げているのだと、私は思っていた。でもそれは違うのだ。違うわよと妻が云ったのだ。

いつ聞いた言葉だったか。家に戻った後のことだ。

違うのだ。他ならぬ妻がそう云ったのだから間違いはない。

湾に沿うようにしてずっと道路はあるのだった。私も後に地図で確認してみたのだが、その道は途中から海岸線を離れ、山の背後を通って、ちゃんと目的地まで通じていた。

目的地。

あの、宿。

私の、否、七年前の私達の目的地はこの海岸ではなく、この磐山の裏側に位置する一軒宿だった。

その宿は慥かにこの侘びしい岬にある。そしてこの小さな浜に通じている。否、汽船を使わないでこの丸石の浜に来ようとするなら、あの宿から降りて来るよりないのだ。浜の左右は険しい岩場なのである。

あの時妻は船上で、岩場を伝えれば来られるようなことを私に云ったのだけれど、実際にそれは無理なことのように思える。見た目は行けそうなのだが、左右の岩場は切り立っているし、渡るのはかなり難儀だ。つまり、この丸石の浜はあの宿のプライベートビーチのようなものなのだろう。

しかし、宿の方は磐山を回り込んだ中腹にあり、この海に面している訳ではない。

そして内陸を進むだけでもその宿に到着することは可能なのである。

しかし、ならばどうしてあの時、私達は船に乗ったのだろう。

七年後の今、私は何の疑問も持たずに汽船に乗った。あの宿に行くには汽船に乗らなければならぬと私は思い込んでいたし、今も思い込んでいる。私にとってあの宿は、車で乗りつける場所ではなく、汽船で行く処なのである。

船は一日二度しか往復しないと云うことだから、私は今日も二時間ばかり船着き場で時間を潰した。

もう一度振り向くと、老人は見えなくなっていた。座ったか、反対側に回ったのだろう。もう少し経てば、あの船はあの騒音を鳴らし乍ら元の場所に帰って行く筈だ。

あの老人以外、誰も乗せずに。

何だか老いさらばえた船など見たくなかったから、下を向いた。あの時の妻の言葉をなぞるように私は外国の塵芥を探してみたのだけれど、そんなものはひとつもなかった。皆、その辺のコンビニで売られているようなものばかりである。

少し磯の香りがして、気持ちが悪くなった。

私は後ろを見ないように見ないように心掛け乍ら、丸石の浜を移動して、物置きのような汚い小屋の横の坂を登った。

小屋には扉がなく、中には破れた投網と、何故か顔の壊れた石地藏がある。地藏の横には自動販売機で売っているようなカップ酒の空き瓶が二本ばかり転がっていた。

水子地藏なのよ。

妻はそう云っていたが、それは多分嘘だ。

慥かにこの岬には水子供養の地藏尊が安置されている地藏堂がある。しかしそのお地藏様を祀ったお堂があるのは磐山の裏側、宿から更に先の、断崖の途中なのである。私は地図で確認したのだ。

そこは、この浜よりも更にアクセスが不便なだった。崖伝いに橋のような細い通路が設けられていて、そこを伝って行くのである。それでも参詣する人はいるらしい。何よりこんな、朽ちた地藏じゃない筈だ。

違うんだよ、と私は心中で思う。

妻に伝わるものではない。

違うんだよ。そうじゃないんだよ。お前は間違っているんだよ。

私は小屋に一瞥をくれ、坂上に立った。坂の上は平らになっていて、少しだけ見晴らしが好い。でも振り返るときと死にかけの老人が睨んでいるから、私は海に背を向けたまま、更に徑を登る。そして宿へと続く、大きくカーブした道に足を踏み出す。

左右には藪くさぶだか叢くさむらだか、そうしたものが繁茂している。でも青青としている訳ではない。何処どこも彼処あそこも白茶あかけている。海風が当たる所ところ為せいだろうか。土地が枯れているのだろうか。地べたも植物と同じような色だし、花も咲いているようだが、別に綺麗には見えない。

地形的にはかなり変わっているが、風景は全体的に単調なのである。

道は上りで、緩やかには見えるが結構な高低差があるから、きつい。

三分の一も登ると汗をかいてしまう。気温は暑くも寒くもない。半端な処だから達成感も何もないし、爽快な汗ではない。ただべたべたとして厭な気分になるだけだ。

半分以上登ると、もうあの石浜は見えなくなる。

振り返っても外海が見えるばかりで、あの汚い船も何も見えない。ああもう老人からは見えないんだと安心して立ち止まり、躰からだの向きを変えた途端に、あのだんだん云う騒騒しい音が見当外れの方角から聞こえて来たので、私は何だか見透かされたような気持ちになってしまった。

音はすぐに小さくなって、潮騒だか風の音だか草の音だかに紛まぎれて消えた。

あの船が帰って行ったのだろう。誰も客を乗せずに。死にかけて老人だけを乗せて。

暫しばし立ち止まって、空を見ていた。

雲も何にもないな。

もう半分を登った。

もう、海は見えない。どんな具合になっているのか解らないけれど、登り切った磐山の裏側からは空しか見えないのである。海の音らしきものは聞こえるから、多分海は近いのだからけれど。

道の終わりには柵さくがあつて、柵を越すと野球場くらいの広さの平らな土地がある。

車が一台だけ停とまっていた。

矢張り陸路で来られるのである。

と、云うよりこのスペースは駐車場なのかもしれない。七年前には一台も停っていないから、そう思わなかっただけなのか。広場を斜めに突っ切ると、また径こうちがある。

この辺りまで来ると、すでに奇景でも何でもない山道である。植物も見慣れたものだ。見慣れていると云うだけで種類も何も判りはしないのだが。妻は植物に詳しくあったから、あれこれ云っていたように思う。

径はすぐに石畳いしだまになる。石畳が始まる処に木の柱が立っていて、矢張り木造りの看板が下がっている。

旅荘かわばた、と記してある。

文字の感じは記憶通りだった。

石畳の細い道を暫く進むと、左右に石燈籠が現れ、やがて和風の門構えが姿を見せる。景観は、完全に日本的なそれになっている。明らかに石浜の奇景とは断絶があるのだけけれど、グラデーションを描くように変化する所為か、あまり突飛な感じは受けない。

勿論一度訪れて知っていると言う所為もある。門を潜る。

宿は典型的な和風旅館である。高級そうに見えるけれども、古いだけである。妻の話だと昭和の初めに建てられたもののだそう。そう聞いて、七年前はそんなに古くないじゃないかと思つたものだ。

今見るとかなり古い。

船とは逆の感覚である。

秋は紅葉が綺麗なよ。

なる程あの樹は紅葉なんだな。

七年前の妻の言葉に、私は今になって応えている。

上ばかり見ていたので気づかなかつたが、玄関先には仲居が出て来ていて、いらっしやいませなどと云っている。予約したものですと云つて名乗ると、承つておりますと云つて仲居は靴に手を差し延べた。持つて貰うには及ばないと云つて、私は玄関に入った。

荷物を持たれるのが嫌いなのだ。

何もかも、記憶のまま。

古びた下足箱。

並べられたスリッパ。

帳場に飾られた営業許可の額。棚に並べられた布袋像。

時代の知れない大きな花瓶に活けられた枝物。草臥れたソファに、小振りなテーブル。

その上の、硝子の灰皿。

あのソファに妻は座っていて、この帳場で私が宿帳を書いたのだ。

帳場の横に、熊の剥製が置いてあつた。まるで記憶から抜け落ちていたが、慥かに以前もあつたのだ。

番頭の顔も、多分同じだ。こちらでも覚えていた訳ではないけれど、風景の一部として違和感はないからきつと同じ人物なのだろう。そうすると、この覇気のない男も七分分齡を重ねていることになるのか。

靴を床に置いて記帳をしていると、幾分年配の仲居が寄つて来た。仲居は止める間もなく靴を持ってしまった。こうなると返せとも云えないので、少し厭だつたけれど、そのまま持たせることにした。

「七年前に一度来ているのだよ」

私は、番頭に向けてでも仲居に向けてでもなく、下を向いたまま云った。

「その時と同じ部屋を所望したのだけれど、話は通っているだろうか」

承っておりますと番頭は唖れた声で丁寧に云った。

「牡丹の間で御座居ます」

そうだ、そんな名前だった。私には部屋の名前が判らなかつたのだ。

「どうして判つたのだね。私は忘れていたのだが」

「当方は、宿帳をずっと保管しておりますのです」

「それじゃあ探して調べてくれたのかね。お手間を掛けたね」

「お客様が正確な年月日をお教え下さいましたので、何の手間も御座居ませんでした」

番頭は首を突き出すような恰好をした。挨拶のつもりか。仲居が御案内致しますと云って歩き出す。

番頭がそのままの格好で動かないものだから、私は仲居に続いた。

長い廊下に行く。廊下は真っ黒で、艶艶に磨かれている。

東京からいらしたのですかね、と仲居が尋いた。

「まあ、東京と云っても都下だからね。神奈川県に近いのさ」

「そっちの方はみな東京で御座居ますよ、田舎者に区別は御座居ませんです」

まあ、そうだろう。

一度曲がると、窓の外に中庭が見える。

同じだ。

綺麗な庭だねと世辞を云うと、手入れが大変で御座居ますと云われた。

「庭師が入るのがじゃないのかね」

「庭師が入りますが、お掃除は私どもが致します。実の成る樹が多いので、地面が汚れるのですな」

そう云うものだろうか。

中庭を望める部屋は三つあるので御座居ますと仲居は云った。

「当館は庭が自慢で御座居ます。でも、部屋から他のお部屋が覗けないように考えて、この庭は造られているので御座居ます。夏場は障子を開け放していらっしゃるお客様もおりますので、ですから各お部屋から観られます庭は、どれも様子が違って観えるもので御座居ます。牡丹の間からの景色が一番良う御座居ますよ」

「そうだったのかい」

随かに、そう云われればそうなのだろう。

七年前、私は庭ばかり覗いていたし、何度も庭に降りただけけれど、
そう、庭に降りただけけれど、
庭では、

他の部屋が覗けたような記憶もないし、他人の視線も感じはしなかった。
こちらで御座居ます、と仲居は云った。

牡丹、と記してあった。

格子戸を開けて、襖ふすまを開けて。

部屋は広い。次の間付きだし、一人で泊まるには広過ぎる。

部屋に入ると畳の香りと埃ほこりの匂いがした。

それから庭が見えた。

大きな窓全部が明るい庭の風景で、逆光気味の部屋は真っ黒に見える。

お荷物此処にお置きますと云って、仲居は床の間の横に鞆を置いた。私は真っ直ぐ縁側
まで出て庭を一望した。七年前にそうしたように。

「お客さん、二度目で御座居ますのねえ」

仲居は、多分茶を淹いれている。ああ二度目だと答えた。

「こんな辺鄙へんぱな処にねえ。お仕事でいらっしゃいますの」

「仕事じゃあないよ。田舎と云うが、いま流行はやりの隠れ宿のようで好いじゃないか。好きな
のだよ。この頃は此処も繁盛しているのじゃないかね」

閑古鳥かんこびで御座居ますと仲居は云った。

「今日なんか、泊まり客はお客様だけで御座居ましょう。夏場は少しありますが、冬には客
足は途絶えてしまいますからなあ。家族連れが来るような場所でも御座居ませんしねえ。そ
うだ、お客様、この前はお二人でいらしたんですわねえ」

「宿帳を見たのかい」

覚えていましたのさと仲居は云って、お茶で御座居ますと続けた。

「覚えていた。僕をかね」

「お客様と、奥様で御座居ます。私が御案内したんですよう」

「そんなもの、覚えているものかい」

「覚えちゃありませんけども、忘れもしません」

その感覚は解る。

「この宿を見つけたのは妻なんだ。何処で調べたものか、気に入ったようだった。僕も気に
入ったのだ」

「この度は、奥様は」

「妻とはね、離婚^{わかれ}た」

仲居は一度辛いものでも喰ったような顔になって、それからづが悪いと云わんばかりに視線を下げた。

「いや、別に構わないよ。もう離婚して三年になるしね。別にもう、どうとも思っちゃあいない。それに、こうして自由が利くからね。独身^{ひとりみ}も好いものだ」

「はあ、それで御座居ますか」

「好い宿だったからまた来ようまた行こうで、気がつけば七年さ。その間に夫婦の方がおかしくなってしまった訳だ。もう一度一緒に来ようと思っていたのだが、まあ一人で抜け駆けだ」

私は庭から視線を離さずに座敷に戻って、座椅子に座った。仲居が茶を差し出す。

「それでは、この部屋は奥様との想い出の場所、と云うことで御座居ますのかねえ」

「想い出ねえ」

記憶は鮮明だ。でも。

「いや、そんな未練がましいものじゃないよ。僕は此処が好きなんだ。妻は」

関係ないんだよ。

立ち入ったことに口を挟みましたと云って仲居は申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいんだよ。まあ、船で来ると云うのも好いじゃあないか。風情がある」

仲居は頭を上げ、お客さん汽船に乗って来なさいましたか、と云った。

「ああそうだ。驚くようなことかね」

「まあ驚きやせんですが、この頃じゃああの汽船に乗る者は居りませんですよ。大体、此処に船で来られるってことも、船が出てるってことも知りませんからねえ。最近の人は」

「そうなのか。七年前も乗ったんだがな」

あの時は崖崩れがありましたのですと仲居は云った。

「国道が塞がるとこつち側には来られませんでねえ。あの時は汽船も少し繁盛したでしょうが、その時くらいで御座居ますよ。今年の内には廃止されると思いますかね」

「そうか。じゃあ乗って良かったよ」

「そんな好いものじゃ御座居ますまいに」

仲居はそう云うと何やら色色と説明をして、チップを渡すとごゆつくりと云って部屋を出て行った。

一人になった。

私は茶をひと口だけ啜^すって、すぐに立ち上がり、縁側に行つて硝子^{ガラス}戸を開け放った。噫^{あゝ}、庭だ。あの庭だ。

七年前此処に来た時から、私と妻の関係は壊れかけていた。いや、それは正確な言い方ではない。壊れていたのは妻だ。そして私は、その壊れた妻との関係に疲れていただけだ。その後、四年ばかりは騙し騙し続けたのだけれど、結局は駄目だった。私が保たなかったのだ。

保たなかったと云うよりも、妻との関係を維持することに興味を失った、と云うべきだろうか。妻は心身症のようなものだったのだろう。冷静に考えるなら彼女の反応は逐一異常なものだったのだ。しかし若かった私はそれをいちいち真に受けて反応し、苦しんで、随分と諍いもした。いま思えば医者に診せるなりすれば良かったのである。それは、治療さえ施せば快方に向かうものだったように思う。

何とかなると思っただ。

六年続いた。

でも、後ろの四年は惰性だ。

この宿を訪れた後、私は妻と暮らすことそれ自体に興味を失ってしまったのである。

あの日から。

蘇鉄と云うのか、何と云うのか、妙にエキゾチックな植物が、割りと潇洒な感じで纏められた庭の中で異彩を放っている。妻は、あれが邪魔だ、と云った。

庭が自慢だとか云っていたけど、あんなもの生やしちゃぶち壊しよ。

こんな宿、来るんじゃないかった。

自分で決めて、文句を云う。

私の所為にする。

うんざりだ。

厭だ厭だ厭だ。

でも、七年前の私は、まだ妻を想う気持ちを持っていた。何か希望めいたものを持っていたのだ。厭だったけれど、辛かったけれど、肚が立ったけれど、優しくされると忘れた。甘えられれば許した。謝られると哀れに感じた。でも、そうした平穩はすぐに崩れた。妻は、すぐに理解不能の何か解らないものに豹変した。

蘇鉄の横に、苔生した石燈籠がある。

石燈籠の横には、なぜか小石が円錐状に積んである。そして池がある。

観れば観る程、不思議な造りである。

食事をするまでは、それでも何とかなっていた。

部屋に運ばれた膳は、私には満足のゆくものだったのだが、妻の口には合わなかった。

矛先は私に向けられ、私は閉口した。

よくこんな酷い料理が食べられるわね。

どうして不味いと云ってやらないの。

不味いと思わないからだ。

そのひと言で、喧嘩になった。酷い喧嘩だったが、酒を飲んでいるうちにどうでも良くなり、やがて妻は突然しおらしくなって、ご免なさいと詫びた。私はそんな妻が愛おしくなつて、

妻を抱こうとした。

甘えるように躰を任せていたのに、妻は私が浴衣の帯を解こうとすると激しく拒んだ。

そして私を突き飛ばし、悪罵を浴びせて次の間に行き、そのまま襖を閉めてしまった。

私は一時間程放心していた。

この、庭を覗て。

あの枝も、あの花も、あの葉も。

私は何も考えず、ただ庭を覗たものだ。そして。

その時、まだ私は妻に執着があったのだろう。

私は、何を契機にしたのかは忘れたけれど、縁側からそつと座敷に上がり、静かに襖を開けた。

もしかしたら、柔らかい寝具の上で、妻は私のことを待っている。そんなあり得ない幻想を七年前の私は抱いていたのだ。単に昂まった情欲の遣り場に困っただけだったのかもしれないのだけれど。

妻は寢息を立てて眠っていた。

浴衣の裾が乱れて、真っ白い腿が顕になっていた。

暫くその、細く切り取られたすべすべした肉の一部を眺め乍ら、私は大いに逡巡して、襖を閉めた。

そして、庭に、この庭に降りたのだ。

月が明るかったなあ。

耿耿と照っていた。

池の縁まで行つた。水面が鏡のように滑らかで、その艶やかな表面にも矢張り耿耿とした月が映っていた。

池の縁を見て、ふとあの丸石の浜を思い出した。石が積んであったからだろう。私は、どう云う訳か妻の仕草を真似て、綺麗に積んである石のひとつを爪先で持ち上げてみたのだ。た。

勿論、何もなかった。韓国の洗剤の箱も、塵芥も船虫も、何もなかった。

もうひとつ。もうひとつ。四つ目、だったか。
四つ目の石を持ち上げた時、私は、石の下に。
何かを見つけた。丸くて白くて小さいものだ。

おや、と思い、屈んで良く見た。何だか判らなかつた。私は左右の石を除け、その下の石も動かしてみた。

その物体には続きがあった。いや。それは。指だった。

細い、白い、綺麗な、にんげんの指だった。

石の下に、人間が埋まっている。

何故だろう。その時既に私は、死体が埋まっているとは思っていなかったようだ。冷静に考えれば生きた人間が土中に埋められている筈はないのだから、余程いかれていない限りは死骸だと思うだろうに。

そう考えると少し怖い。死骸だったなら決して気持ちの好いものではない。それ以前に、犯罪だ。

でも、私は然して混乱もせず、指先でその指の周りの土を掘ったのだ。
逆も美しい形の、女の手が出て来た。

噫。

この先に、女が埋まっているのかと、その時の私は思ったようだ。私は妻のことも何もかも一時的に忘れて多分無我夢中で土を掘り返した。でも。

何もなかった。

埋まっていたのは手首だけだった。

女性の右手の手首である。爪の形も整っていて、指の長さもバランスの良い、それは美しい形だった。

私は、手首を拾い上げた。

作り物ではなかった。綯う方なき人間の皮膚である。掌の柔らかさも、関節の具合も、何もかも、生きた人間のそれであった。土が乾いていた所為か余り汚れてもいなかった。

ああ、手首だと、私は思ったものである。

切断された手首だとは思わなかつた。誰の手首だろうとも思わなかつた。ただ、手首だと思つた。何故かは解らない。

もしかしたら体温があったからかもしれない。

ひんやりとした、女の体温。死骸のそれとは違う。

私は、手首を池の水で洗って、浴衣の袖で丁寧に拭いた。